# 論文審査の結果の要旨

氏名　　細川 道久

この論文は、北アメリカの大陸国家・カナダ連邦が、19～20世紀の困難な歴史のなかで、どのような国民意識に支えられて存立し、なおまた多文化・多民族の現代国家として独自の生命力をみせるにいたったかを考察するものである。そのさいに当然ながら、カナダという国家のおかれた、イギリス帝国の自治領という歴史的な位置、アメリカ合衆国との近接といった問題が正面からあつかわれ、1867年、カナダ自治領の成立いらいのナショナリズムとイギリス帝国のプレゼンスが、多面的に考察される。

第１章は、問題の所在とこの論文の方法を明らかにする。とりわけ問題になるのは、カナダ史におけるイギリスのプレゼンスの継続、イギリス帝国研究におけるカナダ、といった観点である。現状では、こうした観点からの研究は皆無に近い。本論文では、カナダ史における対米か対英かといった二項対立でなく、イギリス帝国を離れることなく帝国の分権化を求めた動きに注目する。とくに帝国記念日に絞る理由、そして利用する史料についての批判的討論もおこなわれる。第２章は、19世紀後半のカナダ・ナショナリズムを考察する。まずは「ロイヤリストの伝統」の創出が分析されたうえで、カナダにおける教育改革と歴史教育に尽力したジョージ・W・ロスとクレメンタイン・フェセンデンに注目し、それぞれの残した文書および著作、そしてオンタリオ州教育省の史料が分析される。カナダと帝国の両者にたいする「二重の忠誠」を訴え、「ロイヤリストの伝統」を広めるにあたって、ロスとフェセンデンのはたした役割が解析される。第３章は、1899年に創設された帝国記念日の最初の年の催しを、オンタリオ州とケベック州について、おもに新聞史料を用いて明らかにする。２つの州は英語圏とフランス語圏の中心をなすが、対照的な２州における式典の意味合いおよび反応の違いが考察される。第２章とともに、この論文のもっとも充実した部分といえる。第４章は、考察を地理的にオンタリオ州に絞ったうえで、時間的に1899年から1971年まで延伸して、オンタリオ州教育省が帝国記念日の教育指針について教員にむけて指示したブックレット類を検討する。これによって、カナダ社会はイギリス帝国のミクロコスモスとみなされ、多民族・多宗教の統合体と考えられていたこと、イギリス帝国の延長上に国際社会が表象されていたことが明らかになる。

この論文の独自性は、カナダ史における学校教育と帝国記念日をめぐるイシューに絞った分析と立論にある。従来の研究史の隘路に正面から取り組み、おもに教育および地域史をめぐる史料を踏査し、その史料群の分析によってカナダ史を再構築しようとする細川氏の情熱は特筆に値する。氏の既発表論文類はすでに少なくないが、本論文はそれらの集積ではなく、オリジナルで緊密な構成をとる一つの作品として提出されている。あえて欠点を挙げるなら、第４章は時系列にそった整理に傾き、議論がやや見えにくくなっている。また英語、フランス語、先住民の言語の交じるカナダの固有名詞およびカナダ史特有の用語については、この論文で現在配慮されている以上になおさら慎重な注意が必要であろう。文体のやや生硬な箇所、繰りかえしも無いではない。このように留保すべき点はあるが、本論文が細川氏の20年にわたる堅実な探求の結実であり、学界に大きく貢献する仕事であることは明らかである。

以上により、審査委員会は一致して、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。